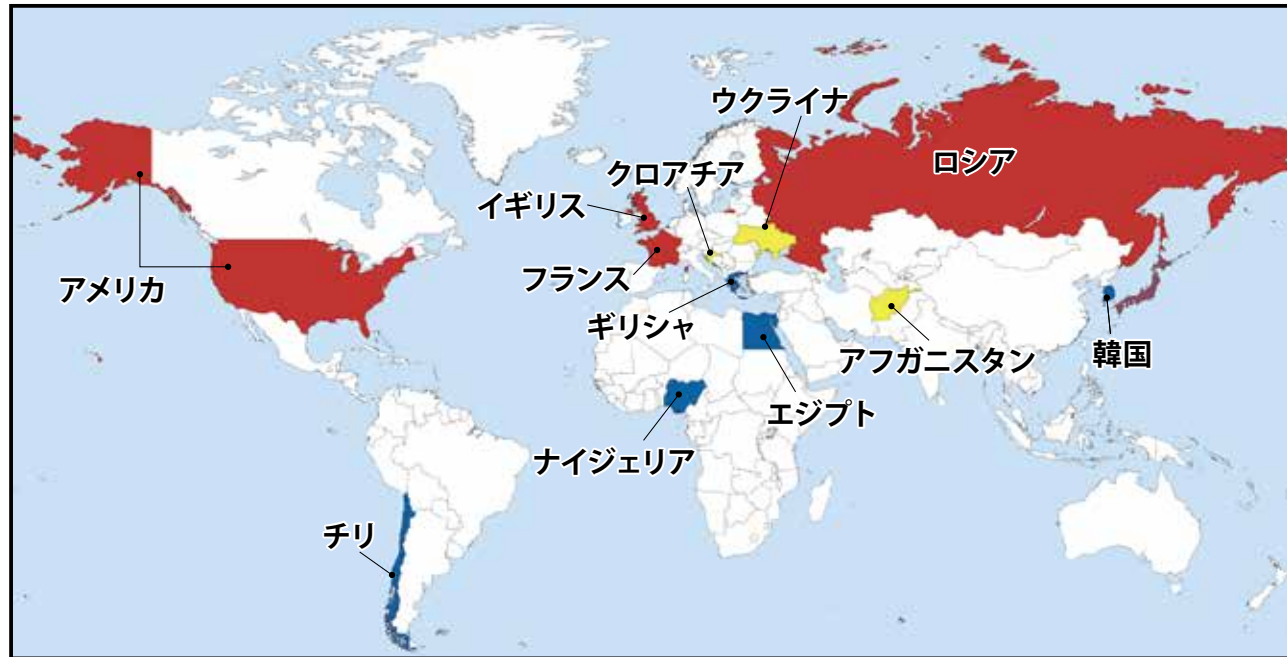
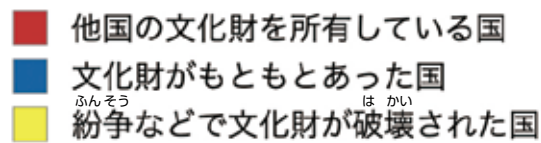
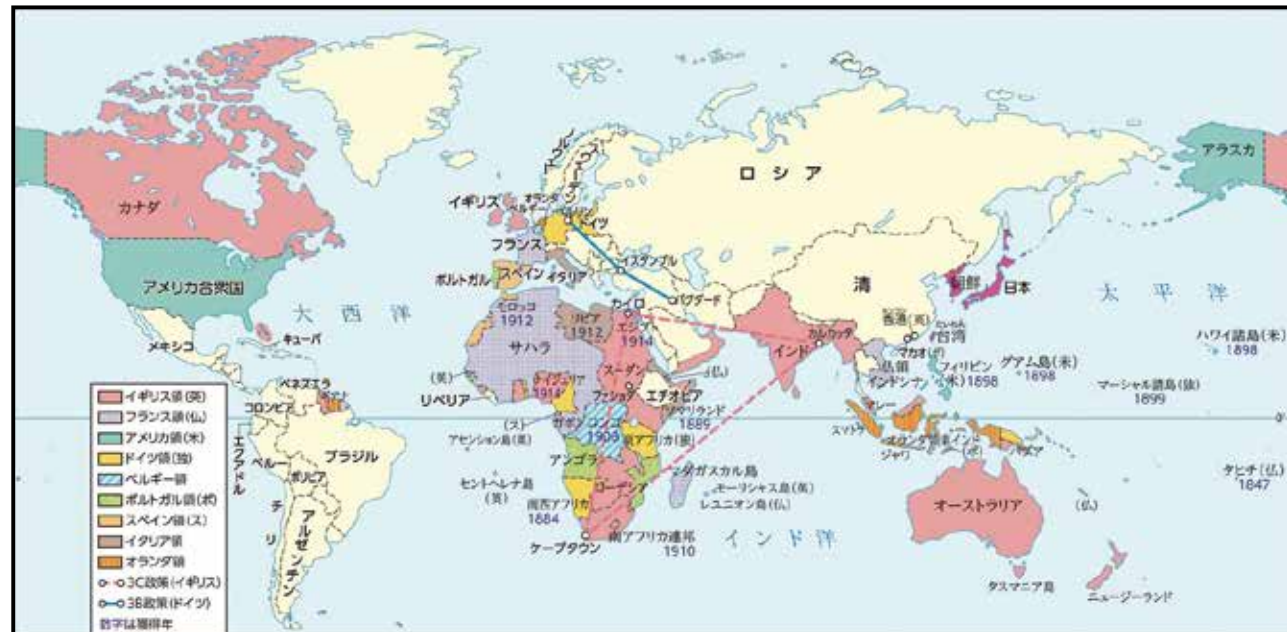


資料① 本文や資料に登場する主な国々



本文や資料に登場する主な国々

資料② 19世紀末から20世紀初頭にかけての世界の分割 ぶんかつ

『明解 歴史総合』(帝国書院)より作成

資料③ 普遍的博物館の重要性と価値に関する宣言

(ルーブル、メトロポリタン、ボストン、プラドなど欧米の主要な18の博物館の声明)

貴重な文化財は一国の所有ではなく世界中の人々のものであり、これらの博物館にあることで、より多くの人に文化財を公開することができる。

初出=Webマガジン『artscape』2023年2月15日公開 よりー

初出＝Webマガジン『artscape』2023年2月15日公開 より一部改変
(DNP大日本印刷株式会社・発行)
八巻香澄「ミュージアムにおける脱植民地主義——シングル・ストーリーからの脱却」より
https://artscape.jp/focus/10182871_1635.html

資料④ パルテノン神殿の彫刻

大英博物館の展示品の中でも特に多くの人が訪れるのが、古代ギリシャのパルテノン神殿に飾られていた大理石彫刻「エルギン・マーブル」だ。19世紀初頭、英国の外交官エルギン伯爵がオスマン帝国支配下にあったギリシャの神殿から持ち帰り、英政府が買い取った。

著作権の関係上、省略

ギリシャ政府は一連の彫像を「略奪された」
として返還を求めているが、大英博物館は、
彫像はオスマン帝国との合法的な契約のもとに

大英博物館のエルギン・マーブル※1

資料⑤ イギリスの新聞のアンケート (2005年)

質問「ロゼッタストーンは(エジプトに)引き渡すべき時ではないか？」

答え①「大英博物館は人類が共有する200万年の歴史のグローバルな展示棚だ」

答え②「エジプトの博物館におくと、はかりしれない価値のある古遺物がそこなわれるおそれがある」

答え③「返還は、同様な要求の流れに門をひらき、大英博物館の展示室が空になるだろう」

答え④「博物館と文化遺産遺跡を整備するために、エジプトはすでに1億1000万ポンドを投資してきた」

答え⑤「200年におよぶ管理ミスと略奪は、エジプトからもっとも重要な古遺物をはぎとった」

荒井信一『コロニアリズムと文化財』(岩波書店、2012年)より一部改変

資料⑥ 大英博物館のモアイ像

大英博物館は大小2体のモアイ像が展示されており、大きなものは高さ約2.4メートル、重さ約4.2トンで、玄武岩でつくられた珍しいタイプだ。現地語で「失われた・盗まれた友人」という意味の「ホアハカナナイア」と呼ばれている。1868年に艦船HMSトパーズの船長リチャード・パウエル提督が現地の許可を得ず持ち去ったとされ、ホアハカナナイアは小さなモアイ像「ハヴァ」とともにヴィクトリア女王に贈られた。1869年、女王は2体を大英博物館に寄贈した。

この2体をイースター島に返還するべきという声は、これまでも何度か起こっていた。しかし今年1月31日、100万人のフォロワーを持つチリのインフルエンサー、マイク・ミルフォートがSNS上でモアイ像の返還キャンペーンを開始。フォロワーに、「モアイを返せ」というコメントを大英博物館のSNSアカウントに投稿するよう呼びかけたところ、大英博物館のコメント欄がこのメッセージであふれ返ったことから、同館は投稿欄を閉鎖するという対応をとった。

ART news JAPAN 2024年2月21日より一部改変

ART news JAPAN 2024年2月21日より一部改変

著作権の関係上、省略

大英博物館のモアイ像

資料⑦ 文化財の破壊

ロシアによる侵攻が続くウクライナで、文化遺産の破壊が深刻さを増している。7月下旬には、世界遺産・オデーサの歴史地区も攻撃を受け、多数の歴史的建築物に被害が出た。戦争で貴重な文化遺産が破壊される歴史が、またも繰り返されている。(略)

ユネスコ(国連教育科学文化キカン)は今年1月、オデーサの歴史地区を世界遺産に登録したばかり。さらに災害や紛争、開発などの理由から国際的に保護が必要な「危機遺産」としても登録し、破壊から守ろうとしてきた。ユネスコは同日、「最も強い言葉で非難する」「意図的な文化遺産破壊は戦争犯罪に当たる可能性がある」とする声明を出した。(略)

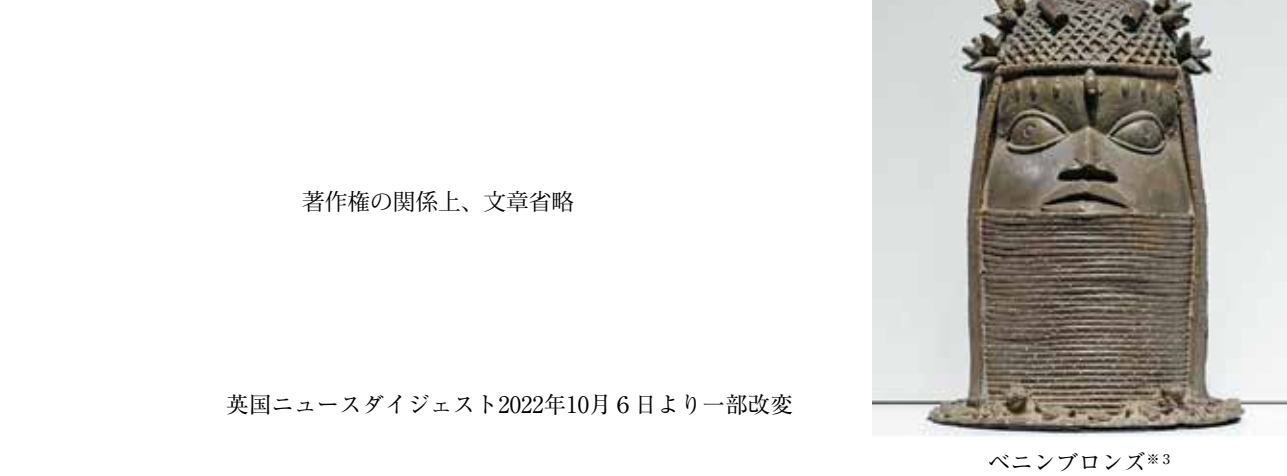
文化遺産を守るための国際的な約束として、危機遺産のほかに、武力紛争時の文化遺産保護を定めた通称「ハーグ条約」がある。第2次世界大戦で多くの文化遺産が被害にあったことを受け、1954年に導入された。ロシアも批准(確認・同意)している。ユネスコはロシアに条約の順守を訴えるが、文化遺産の破壊は続いている。紛争時に文化遺産を守るのは容易ではない。(略)

地球上に残る歴史遺産は人類全体の宝だ。世界遺産はその代表で、国家や民族の象徴でもある。ところが、紛争時には負に作用することもある。

たとえば、ユーゴスラビア崩壊にともなう紛争で標的にされたクロアチアの都市ドブロブニク。「アドリア海の真珠」とうたわれた世界遺産の町は砲弾の嵐を浴び、大きく破壊された。民族のよりどころへの攻撃は、敵の士気をくじく絶好の手段にもなる。

アフガニスタンの仏教遺跡バーミヤンは2001年、当時政権を握っていたイスラム主義勢力タリバンの手で破壊された。国際社会が止めようとしたが、かえって遺跡が交渉を有利に進める材料になると気づかせてしまった。

資料⑧ ベニンブロンズの返還



資料⑨ 琉球国王の肖像画の返還

太平洋戦争末期の沖縄戦の混乱で行方がわからなくなっていた、琉球王国の国王の肖像画「御後絵」などが、アメリカ国内で見つかり、沖縄県に引き渡された。県は2001年、アメリカのFBI(連邦捜査局)に日本国外に流出したとみられる文化財の捜査を要請していたが、2023年3月、外務省を通じて、アメリカ国内で22点が発見されたとの連絡があり、14日、県に引き渡された。※4

琉球王国の国王の肖像画は日本国内で現存が確認された事例がなく、県は、琉球・沖縄の美術史や文化史の研究で重要な手がかりになると期待を寄せている。

FBIが調べたところ、遺品にはタイプライターで書かれた無記名の手紙が添えられていたということで、FBIのケリー特別捜査官は「手紙を読めば、これらの遺品が第2次世界大戦末期に沖縄で集められたもので、略奪された可能性が高いことは一目瞭然だった」と説明している。

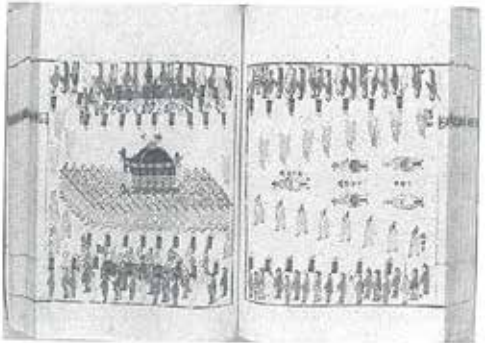


琉球国王の肖像画
(沖縄県教育委員会提供)

NHK NEWS WEB 2024年3月16日掲載記事を一部改変

資料⑩ 「朝鮮王室儀軌」の返還

「朝鮮王室儀軌」とは、朝鮮王朝時代(1392～1910)の結婚式や葬儀などの主要な儀式や行事を、文章や絵で記録した書物である。朝鮮王室の儀礼を理解するための貴重な遺産として、2007年にユネスコの「世界の記憶」にも選定された。「朝鮮王室儀軌」は、1922年に朝鮮総督府から日本の宮内省に寄贈され、植民地支配が終わった後も宮内省の書庫に保管され続けてきた。2001年に宮内庁が所蔵する「朝鮮王室儀軌」の存在が広く知られるようになると、韓国でその返還を求める動きが盛んになり、2011年に宮内庁が所蔵する他の図書とともに日本側から韓国側に引き渡された。



朝鮮王室儀軌

五十嵐彰『岩波ブックレット1011』(岩波書店)より一部改変

- ※1 画像はWikimedia Commonsより
- ※2 画像は世界遺産検定ホームページより
- ※3 画像はAFP BB News 2022年9月26日より
- ※4 内3点は一点の絵画が3分割されたものとその後確認されたことから、返還された点数は20点に修正されている。